

Describe The Land In Agriculture

掲題の英文を訳したら、どんな風になるでしょう。実はこれは、日本造園学会の学会誌『ランドスケープ研究』（79巻1号）に掲載される拙文タイトルを英訳したものです。原文は「土地の系譜に並ぶ仕事」と題しています。

2月、来る春に苗木を植えるべく、古い木を伐採してできあがった緩やかな広場に、長野県から旅をするパン職人がやってきてくれることになりました。軽トラに積んだ自家製ドラム缶窯でこたわりパンを焼いてくれます。タフな人で、彼女はその後、そうやってパンを焼きながら四国を回っていくのだとか。それならば/世にはない、海と集落と段畑の、自慢のロケーションを大いに活かそう。この広場にありきたりのもので空間を作って、まるごとカフェにしてしまおう。そんな目論見で声を掛けはじめました。

急なお誘いにも、10組ほどのお客さん

が遊びに来てくれました。半分以上は同世代の、子育て中のお母さんたち。僕たちは自分の生産物で作った自家製シヤムに、スープとコーヒーを持ち込みます。焼き上がったパンは籠に抱えて、果樹栽培で利用するモノレールの運搬車で子どもたちが農道から下ろしてきます。「できたよー!」「わーい!」ジヤン、オッチャンとしかずい進めない、言ってみれば「ただ」の農地がまじりこんで、愉快です。風もなく穏やかな、陽だまりのような時間にも恵まれました。これまでも、全園地で目指す有機栽培の一環に、子どもたちが行きたいと言えば、なるべく連れてくるようにしてきましたが、集落をぐるり囲う石垣の段畑の一端でおこなったこの催しは、それを一歩進めた趣を醸します。

古の人々が、文字通りひとつつ石を積み上げて成した土壌観なるこの石垣の段畑。その偉業に感謝しつつも、変にたいさく必要はないと思っています。人間が関わることを止めないまま、それが生きた景観として在り続けていることに誇りを持って、この時代の、あたり前の感覚で捉え直るのが本途

でしょう。生計と道楽は混然としていたはずで、現に、崩れた石垣を修復してみても、生産性という目的以前に、単純に楽しいものなのです。

僕には農業はおろか、食べ物の生産に携わる人というのは、親見ばかりか親族にさえ思い当たりません。そうした境遇を振り返ると、この日この場所で否応なく表現されたものとは、ひとつの文化という気がします。記憶も人づながりも、普段からは大きく超えて、確かにここで生きていると実感する、地域文化をまるごと食べる贅沢な遊び、開き直る農業の、生々しい場面。

2015年3月 うえはらゆき



〒797-0113

愛媛県西予市明浜町狩浜 3-1404

電話： 0894-89-5050 (FAX 兼用)

web： <http://doratomo.jp/~nancha/>

e-mail： nancha@sheep.dog.cx